

箱根駅伝歩き旅 2015



2015年6月

2015年11月

旅のチカラ研究所 植木圭二

第一章 これまでの道程

■はじめに

2015年5月30日午前9時40分、私たちは箱根駅伝第5区のスタート地点に立っている。

私たちとは私と妻と息子の3人のことで、実はこの3人で2014年1月11日に箱根駅伝第1区を歩いた。以後、第2区、第3区、第4区と各区間を、それぞれ休日を利用して歩いてきた。

そして今回は第5区、第6区を歩く、一泊2日で箱根に泊まる旅である。

箱根駅伝とは正式には東京箱根間往復大学駅伝競走のことで、東京・読売新聞社前から箱根の芦ノ湖までの間の往路5区間(107.5Km)、復路5区間(109.6Km)の合計10区間(217.1Km)で競う学生長距離界最大の駅伝競走である。

従って1区間は平均22km程度で、一日に歩く距離としてはちょうど良い。歩数にすると約3万歩、成人男子がゆっくり歩く速度の時速4kmとして5.5時間なので食事や休憩をいれて7時間程度で歩ける。このちょうど良い距離を自分たちの都合の良い休みの日を使って、1日かけて家族で歩く。各区間のスタート地点までは電車やバスを利用して行き、その区間のゴール地点でその日は終了ということを経験して第1区から第4区まで4回行って来た。

■レール&ウォーキングのすすめ

何故、箱根駅伝ルートを歩こうと思ったか。

距離がちょうど良いというのも、歩くことが健康に良いというのも要因ではあるが、それは要因の一部にすぎない。私たちは、旅のチカラ研究所であり、旅の探求をしている。

そう、それは歩き旅というジャンルが存在すると私は思っているからで、歩き旅とは旅の移動手段を車や飛行機ではなく、歩き、つまりウォーキングとしたものである。

旅はその移動手段によって言い方が変わる。自動車での旅はドライブ、バスの旅はバスツアー、船は船旅というように言われる。移動手段が徒歩というと歩き旅になる。昔はみんな歩き旅だったのだが、交通機関の発達により歩きのみの旅が消滅しかけているのである。

しかしながら日常の散歩は単なるウォーキングであって、旅と言わない。なぜなら、それは日常だからである。

多くの人の場合は生活圏というのがあって徒歩1～2時間はその生活圏の中である。その生活圏からの脱出に歩きだけでは時間がかかる。

そこで生活圏を簡単に脱し非日常空間に移動するために電車やバスを使う。徒歩の移動手段にプラスして電車やバスなどを組み合わせた旅のスタイルを、私はレール&ウォーキングと呼ぶことにしている。そして最近私はそれを提唱している。

この提唱は、単なる思い付きではない。

家族で歩くというのは初めてであるが、実は2008年頃から友人たちと歩き始めていた。その友人たちを私はアルチュウと呼んでいる。勘違いしないで欲しいのは、歩くことが好きで歩き中毒（略してアルチュウ）である。あくまでも歩くことが目的ではある。しかし、打ち上げの宴会も捨てがたい。うう・・・やはりアルチュウだ。

そのアルチュウのウォーキングは、距離についてはフルマラソンの42.195kmを意識しており、最初は箱根大平台→藤沢43km、そして東京→藤沢45kmを友人Tさんと歩いた。

それをきっかけにその後は友人Kさんと歩いた主な歩き旅を列挙する。

- ・伊豆大島一周 50km
- ・山手線一周 40km
- ・三浦半島半周 50km
- ・群馬県渋川→四万温泉 40km
- ・千葉県我孫子→成田山新勝寺 40km

そんな試行錯誤の末に、レール&ウォーキングが形になってくる。今回の箱根駅伝ルートの歩き旅は、レール&ウォーキングの現時点の結論と考えている。

2014年1月から始めた第1区から第4区を振り返る。

■2014年1月11日第1区

朝早く電車でJR東京駅まで行き、丸の内口から10分程歩き、大手町の読売新聞東京本社前に着く。ここをスタートに右手に皇居、日比谷公園、芝公園、増上寺そして東京タワーを見ながら歩き、田町から国道15号線を鶴見中継所までの21.3kmである。

東京の真ん中から神奈川県東端まで歩くが、やはり東京は環境が整備されている。車道も広いが歩道も広く、ビルの間を歩いていても皇居をはじめ緑豊かな景色を見ることができる。

しかしながら神奈川県それも川崎市に入った途端にそれが変わる。これは歩かないとわからないが、どことなく街が違うのである。

神奈川県民の私にとって、あまり嬉しくはないが素直な感想である。

例えば東京は交番の設置が多い、実際数は分からないが明らかに多く感じる。交番が、ある間隔毎に必ず設置されていて、各交番は個性豊かな造りになっている。やはり日本の首都だ。

ところが神奈川県川崎市に入ったとたんに交番が目立たない、多分あるのだろうが目に留まら

ない。公園にしてもおしゃれなお店にしても、そして街を歩く人々もだいぶ変わる。道路沿いに放置自転車が多くなり、アルミ缶を満杯にした大きなビニール袋をいくつも持って自転車に乗る人々を頻繁に見かけるようになる。そんな風景を見ながらの歩き旅は結構面白い。

第1区ゴールは京浜急行の鶴見市場の駅から程近い国道15号線側道である。いかにも箱根駅伝というタスキをつなぐモニュメントがある。



鶴見中継所のモニュメント

■2014年2月1日第2区

箱根駅伝の実況放送の中では「華の2区」と呼ばれている。23.1kmと距離が長く、横浜駅前を通過し権太坂や最後の登り坂が続くので各チームがエースを投入する。

戸塚中継所まで残り5kmの登り坂は実際に歩いてみると辛い。延々と登り坂が続く、その道路がバイパス道路のため殺風景な景色がその辛さを倍増させる。

車の騒音を遮断するための遮音壁が車道とその脇にある歩道を包んでいる。空は見えるが景色は見えない。そして車の交通量が多い。歩いている人ともほとんど会わない。このような殺風景な景色は長い距離、登り坂にさらに精神的に追い討ちをかける。

箱根駅伝ルート全ての区間を歩いた中で、この部分が最も景色がつまらない。ただ、これも含めて箱根駅伝であり、駅伝選手のみならず歩きの旅人も「華の2区」を体験することは箱根駅伝を理解する上では重要なことかと思う。



第2区最後の上り坂

■2014年2月22日第3区

第3区のスタート地点の戸塚中継所は戸塚警察署の近くの国道1号線バイパス上なので公共交通機関では不便な場所にある。スタート地点には戸塚駅からタクシーに乗っていく。

戸塚中継所から平塚の中継所までの21.4kmであるが、コースは比較的平坦で歩きやすい。戸塚から藤沢、そして茅ヶ崎に至る。茅ヶ崎に入ると松下政経塾があり、ここを左に見て過ぎると浜須賀の交差点からはゴールの平塚まで海沿いの国道134号線を歩く。



松下政経塾の入り口



湘南海岸のウォーキング道路

国道の歩道を歩いても良いが、せっかくの湘南海岸ではウォーキング道路を歩くことがお勧めである。国道と海の間には防砂林があるが、その防砂林と海の砂浜の間にはウォーキング道路が整備されていて散歩する人以外にランニングや自転車の往来がある。海風にあたりながら、湘南の海を横目に見て歩くという素晴らしい環境である。

■2014年4月20日第4区

平塚中継所から小田原中継所までのこの区間は比較的短く18.5kmである。

平塚中継所から程なく大磯である。大磯は東海道五十三次の宿場町として江戸時代からにぎわい、明治になると温暖な気候のために伊藤博文や大隈重信など多くの政治家の別荘の街になる。

道沿いに旧吉田茂邸宅を発見、門が閉ざされていたが何やら立派そうな感じがする。門の前に立つだけで、あの丸い顔が目には浮かんだ。

偶然、島崎藤村の屋敷をみつけたので、少々見学したりしながら大磯文学散歩を楽しむ。

大磯は近代史と文学の街、その街並みのしっとり感もこの上なく心地よい。この箱根駅伝のレール&ウォーキングだけで通り抜けるには少々もったいない感じもする。

この大磯宿から大磯プリンスホテルと隣接する大磯ロングビーチの裏手を歩き、二宮町を抜け、そして小田原市の市街地の第4区ゴールまで国道1号線を歩くが、ほとんど海はみることができない。



大磯町の街並み



旧吉田茂邸宅

第二章 箱根山登り、山降り一泊2日の旅

■第5区スタート地点へ

小田原駅から小田原城の中を歩いてスタート地点を目指す、朝のウォーミングアップにはちょうど良い。市立図書館の脇を抜け、二宮尊徳を祀った報徳二宮神社にでる。木々に囲まれた雰囲気ある神社で、誘われるまま安全祈願に立ち寄る。

この神社には二宮尊徳の像があり、その前にある立て札の説明書きによれば、同じ像が戦前には全国各地の小学校にも1000体ほど配置されたそうだが戦争中、戦車や戦艦の材料にするためにことごとく供出させられたため、現存するのはここに残った一体だということである。像は当時メートル法を普及させるためにちょうど1mの高さでできているとのことだ。

確かにその像は1mなのであるが、像が置かれている台座が1m50cmくらいあるので、やや見上げるような感じになる。

二宮尊徳は江戸後期にここ小田原で生まれ、5歳の時に暴風雨で近くの堤防が決壊し、家の田畑が流失した。そして14歳で父、16歳で母が亡くなり、尊徳は伯父の家に身を寄せることになった。そこで農業をしながら、荒地を復興させ、20歳で生家の再興に成功する。その頃の姿、つまり農業と荒地復興と読書（勉強）を両立させる姿がこの有名な像になった。日本人の好みそうな話で、この像の前に立つと改めて日本人の勤勉さを感じる。しかし残念ながら最近の子供にはゲームやスマートフォンをやりながら歩く光景しか浮かばない。

その後の尊徳は復興そして勉強の成果もあり藩の仕事でも成功して出世した。そして小田原を出て栃木県に移り、さらに功をおさめその成果を上げた。だからその土地が二宮町と命名されたと言うが、市町村合併により現在は真岡市になったため二宮町の名前はなくなったということである。確かに栃木県真岡付近を旅した時に二宮尊徳の記念施設があったが、今やっとな理由がわかり納得した。

そして神奈川にも二宮町が現在もあるが、この地名はむしろ逆でもともと鎌倉時代から二宮という地名があり、その出身だから苗字に使用したというようである。



報徳二宮神社



二宮尊徳の像

地名の由来とは面白いもので、地名は歴史をひもとくヒントや証拠になるという。自分の住んでいる地域や市、県の名前の由来を知りたくなる。

二宮尊徳像に手を合わせた後、小田原城天守閣前にでる。さすがに天下の名城、再建されたとはいえ天守閣がそびえている。城は、その天守閣によって存在感がでてくる。そして城のある街というのは、城の存在感によって街全体が落ち着いて感じられる。街のどこにいても天守閣が見えるので安心感があり、まさしくシンボル、旅行者にとっては良い目印になる。

私は城下町が好きで、天守閣のあるいろいろな城下町を訪れるが、小田原はその中でも特におすすめである。

豊臣秀吉の小田原攻めに対して城主の北条氏が徹底抗戦したが、最後は圧倒的な大軍と一夜にして城を築いたという一夜城の出現により降伏した。北条氏のこの抵抗の理由は、この城が大きさにおいて戦国時代最大の城だったからである。

小田原城は街の真ん中にある。この城を中心に街が出来たから当然で、小田原駅から近く、相模湾にも近い。従って天守閣からは小田原城下、そして海と箱根や丹沢の山が見える。

そういえば、昔、会社の友人がこの小田原城内で結婚式を挙げたのを思い出した。その時は桜が満開で、まさしく人生の春を小田原城が演出し祝福していた。

■第5区山登り

小田原城の南口から出て程近いところに第5区スタートの小田原中継所があるはずだが、なかなか発見できない。近所の人に聞いたら、古い外郎（ういろう）屋の前の国道の反対のバス停付近とのことで、とりあえずそこらしきところで写真を撮る。

小田原で外郎とはピンとこない人も多いが、アナウンサーの訓練などに使用することでも有名な外郎売の口上に小田原の外郎が出てくる。私たちは時々、草津温泉の草津ホテルで正月を迎えるが、そのホテルを常宿にしている片岡鶴太郎から生でその口上を聞いたことがある。片岡鶴太郎がホストを務める初釜の席である。今その口上を思い出した。

尚、この中で出てくる外郎とはちょうど仁丹のような薬であり、お菓子ではない。

9時40分第5区スタートである。

小田原の街を箱根に向けて歩き始める。電信柱を地中に埋めて空が広く見え、古いお店や新しいが昔の店の装いを残した店が立ち並び、昔の街並みがどことなく味わえる。程なく4階建ての白い建物に挟まれた6階建ての火の見やぐらのようなものが見えてきた。火の見やぐらは6層構造で、各階は5m四方くらいでしっかりとして造りをしており全体的に茶色で木造のような感じに見える。何となく昔の火消し役が城下を見渡しているかの如くであるが白い建物は良くみると小さく小田原消防署南分署と書いてある。さらに火の見やぐらも鉄骨で組まれている。

粋な演出をしてくれるものだとつくづく感心してしまう。公共の建物までもこのようなこだわりでこの街の姿勢(プライド)を感じさせてくれる。



第5区スタート地点



小田原消防署南分署

小田原から箱根湯本までは傾斜も少なく、歩道も整備され歩きやすい。ところが箱根湯本を過ぎ、塔ノ沢、宮ノ下と続く道は山登りの狭い道で、国道1号線なのに歩道がない。山道なので狭いのは仕方ないが、自動車が直ぐ近くを走り結構危ない。

歩道がない道を歩く場合、歩行者は右側通行ということが道路交通法でも定められているが、今回はそれを実感した。やはり右側通行がベストである。理由は、右側通行すると自動車とすれ違う場合に前から来る自動車を視認できるので、接触への回避行動を取り易いのである。逆に左側を歩く場合はすぐ横を自動車が追い越していき、視界に入らないままいきなり追い抜かれるので回避行動を取りにくく、とてもお勧め出来ない。

尚、この道は箱根駅伝ルートであるためか市民団体や学生のランナーも多い。その人たちはなぜか左側通行をしている。駅伝やマラソンの競技では先導車や中継車の関係で左側を走ることになるがそのような車が先導しない場合でも左側通行するような社会慣例になっているようである。



歩き旅の息子と妻、そしてランナー

この歩道無き道を 2 時間程歩く。鳥のさえずりと木漏れ陽、そうかと思うと自動車の排気ガスと自動車接近の危機である。爽快感と緊張感が交錯する。自動車が登れる傾斜なのでそんなに急ではないが、登り坂をずっと歩く。3 人縦列でひたすら歩くが、なかなか休憩ポイントがない。あと 30 分、それでも休憩する場所が見当たらない。そしてあと 20 分、あと 10 分と時間は過ぎ、歩き続ける。大平台を過ぎ、宮ノ下まで来ると、さすがにお腹がすいてきた。

この近辺は公園やベンチがなく、日射を遮るものがあまりない。そんな時に温泉神社という看板が目にとまる。ここで昼食にしようとする近くのコンビニで弁当を買いこみ、そして温泉神社の 20 段くらいの石段を上がり小さな神社の境内に入る。

名前から察して温泉の神様でも祀ってあるかと思いきや、何もそれらしさはない。温泉地に在る神社というだけらしい。箱根はいたるところに温泉があり、ここ宮ノ下も温泉である。

昼食後ほどなく歩くと有名な小涌園の前にくる。この辺りは高級感あふれる別荘地である。

初老の外国人夫婦がバス停のベンチに座っている。見たからに欧米人の仲むつまじい夫婦という感じで上品でやや疲れ気味の奥さんを太った旦那が気を遣って話をしているどこにでもあるような風景である。バスに乗ってどこかのホテルにでも戻るのかと、バスをお待ちですかなどと英語も出来ないのにちょっと声をかけようと思って、英文を頭の中で組み立てていたら、その時に黒塗りの品川ナンバーのベンツがバス停の夫婦の前に横付けされる。運転手が降りてきてベンツの後部座席のドアを開けて、夫婦がありがとうなどと運転手に声をかけながら乗り込む。

この光景を見ていた私も家族もあ然とした。そして少したってから、3 人で顔を見合わせる。言いたいことは同じ、そうここは高級別荘地なのだ。

別荘地と言えば軽井沢を思い浮かべる。軽井沢は夏の避暑地としては抜群であるが、それ以外のシーズンは閑散としている。

しかし、箱根はオールシーズンである。富士山も相模湾も芦ノ湖も近く、風光明媚である。そして都会からの距離もちょうど良い。何しろ駅伝で都心から走っても来られる。

避暑地の高原を歩く、この辺りからは歩道が整備されており歩きやすい。心地良い風を受け、ランナーや自転車の人も気持ちよさそうだ。国道1号線最高標高地点 877m に来る。877m やはり涼しいはずだ。標高が 100m 上がると気温が 0.6℃下がるので、先ほどの小田原よりも 5℃程低い。そして風と木々の緑で体感気温はさらに下がる。箱根は高級な避暑地である。



国道1号線最高標高地点 877m

■第5区下りとゴール

最高標高地点を過ぎるということは、これからは下り坂である。

下り坂になってから少し歩くと精進池という池に出る。この池の周辺は石仏群の宝庫である。道沿いに大小様々なサイズの石仏があるが、その中でも高さ 3.5m 地蔵菩薩（六道地蔵）がある。一つの岩盤から作ったようで見応えがあるが、それが道沿いに何気なくあるということに驚く。

鎌倉時代から室町時代に多くの石仏が造られたとのことで、その頃から石仏信仰があったということとそれが今でも保存されていることは素晴らしい。

精進池の脇にこの石仏群を解説する歴史館があるが、入場無料で無人の歴史館である。立派な建物で冷暖房完備である。ここに足休めの休憩と石仏群の勉強を兼ねて立ち寄る。



地蔵菩薩（六道地蔵）



歴史館と精進池

この精進池から往路ゴールへは約 4km である。いっきに坂とヘアピンカーブを下って元箱根へ降りて行く。そして元箱根から箱根の第5区往路のゴールへは、関所跡を横手に抜けるとすぐである。

ところで、この元箱根はなぜ「元」なのか、地方の名物に良くある元祖と本家というようなも

のだが、江戸時代初期に箱根に関所をつくるにあたり、現在の元箱根の住民が反対したため、当時栄えていた箱根より京都寄りに新たに関所を設置し、関所のある方を箱根と呼ぶようにしたために元箱根に名前を変えたということである。

地名はやはり面白い。あらゆる地名には、歴史やエピソードがある。

16時28分に往路ゴールした。23.22kmを6時間50分で歩いた。

ゴール前には東京箱根間往復大学駅伝競走往路ゴールと刻まれた2m程の石の標識がある。

すぐ前に箱根駅伝ミュージアムなるものがあり各大学のノボリが旗めいている。入場料は500円、大学別のグッズがよく売れるとのことである。



箱根駅伝往路ゴール



箱根駅伝ミュージアム

ここから宿をとってある芦之湯に行くために来た道に戻る。時間も遅くなり、何よりせつかくの温泉宿で早く温泉でゆっくりしたく宿まで途中からバスに乗った。

■きのくにや旅館

今夜は芦之湯温泉で宿をとる。芦之湯は数ある箱根の温泉の中でも古く、平安時代の開湯とのことである。国道1号線沿いバス亭前の「きのくにや旅館」に泊まる。江戸中期の創業で、宿そのものにも歴史がある。荒城の月の作曲者で有名な滝廉太郎や中曽根康弘元首相の常宿だったとのことである。滝廉太郎が滞在中にあの有名な「箱根の山は天下の剣・・・」という「箱根八里」をつくったという。晩年、滝廉太郎は結核を患い、この旅館で療養生活を送ったとのこと、由緒正しい風情ある旅館である。

宿の人に聞くとお正月は箱根駅伝の出場大学が箱根駅伝本番の1月2日にも泊まるとのことで、予約がとれない、しかも正月は特別料金になる。しかし夏休みなどは学生の合宿向けのリーズナブルなプランもあるという。歴史や品格にとらわれずに、現在を、若者を受け入れるという宿の姿勢は好感がもてる。

見まわしたところ満員では無い様だった。土曜夜の宿泊なのに何故かと仲居さんから聞いたところ、箱根の噴火騒動のためにお客が少ないとのこと、特に団体客はキャンセルが相次いでいるとのことである。噴火騒動の大涌谷は駒ヶ岳や神山を越えた反対側であり3km以上は離れている

が、団体客の幹事の立場からすれば致し方ないのだろう。

宿には2本の源泉が引かれており、風呂場はその源泉毎に男女それぞれ2つある。箱根をモチーフにした露天風呂があり、湯船が芦ノ湖の形をしている。泉質は少し白濁の硫黄泉と無色透明の旧重曹泉でどちらも弱アルカリ性である。

私は、白濁それも強酸性の硫黄泉が好きである。群馬の草津温泉、山形の蔵王温泉や秋田の乳頭温泉など、酸性が強いということは殺菌作用があり傷を治癒させてくれる。だから昔から草津温泉で治せないのは恋の病だけと言われている。いや温泉のリフレッシュ作用は恋の病も治せるかもしれない。だから傷心旅行などというものもある。

ここの湯は弱アルカリのため、殺菌作用はないがアルカリ泉特有のヌルリとした感じが少しあるので世間で言う美肌の湯になる。まあしかし酸でもアルカリでも、どちらにしても温泉は良い。湯船につかると今日の疲れがいきなり引いていくことがわかる、思わず「あー」と声が出てしまう。

■最近の温泉旅館に思う

由緒正しいきのくにや旅館であるが、価格は手ごろで今回土曜日宿泊なのに13450円である。もっと高い部屋はあると思うが私は通常はスタンダードな部屋を予約することが多い。

それは例えばラーメン屋に行っても同じで、いろいろトッピングが入ったものではなく通常のラーメンを食べる。ラーメンの基本は麺と汁であり、基本がしっかりしていれば旨いものは旨いのである。逆に基本がしっかりしていなければ、何をトッピングしても旨くない。

宿も同じで、基本はおもてなしの心、つまりサービスであると思う。そのおもてなしの心が食事や部屋に表れる。食事は地元で取れた新鮮なものをいかに味つけるかでありその土地でしか手に入らない旬のものを出してくれるとありがたい。

いくら冷凍技術が発達してきても山奥の温泉旅館でマグロの刺身などが出てきても困ってしまう。

部屋は豪華でなくても、きれいに掃除してあり、メンテナンスされているかが問題である。建物も年を取り老朽化は致し方ない。要は対応に頭を使って気を遣っているか、工夫がされているかである。もてなす気遣いが面倒くささを上回るかである。

食事にはいつものようにビールを注文したが、有り難いことにビールと日本酒がサービスについている。最近はインターネットで予約するとこの様なサービスをするところが増えている。宿としては旅行社への手数料を払うことを省略してもらうことでこの様な直接予約に対してお礼の意味でサービスしているのだが、ならばその分宿代を下げてもらいたいとの声もある。

だが、それは出来ない。旅行社からクレームになる。旅行社と宿との関係はギブ&テイクである。旅行社がお客を集め、宿が紹介を受けることに対する手数料を払っているのであるが、その額は一般に想像しているよりも大きい。もちろんそれには訳がある。夏休みや正月、週末などの繁忙期は黙っていてもお客がくるが、平日や閑散期はそうはいかない。その閑散期にお客をまわしてもらえかが重要な経営的問題である。安定経営のためには年間で空室を減らし、どれだけ客室を有効に使用できているか、つまり客室稼働率をどれだけ上げられるかである。ちなみに客

室稼働率の統計値はビジネスホテル 70%、リゾートホテル 50%だそうだ。旅館はその中間の 60% くらいで、旅館でもその大きさにより差がある。大規模旅館程高く、小規模旅館は低い。

大規模旅館の客室稼働率が高くなる理由は、やはり旅行社から手配された団体客が多くなるのがその要因と思われる。

いろいろ余計なことを考えてしまうが、とにかく歩き旅のあと、それも湯あがりのビールは最高である。

さて、最近の旅館での食事は部屋食ではなく食事処で、さらに椅子に座る立ちテーブルでの提供が多くなっている。この旅館も例外ではなく、立ちテーブルに椅子である。

旅館によっては畳にテーブルを置くこともあるが、なぜ畳の上にまで立ちテーブルを置く mismatch をあえて行うのか。それは食事を出す側と食べる側の双方にメリットになる。出す側は座卓の場合は料理を出すときには座らなくてはならないが、この立ちテーブルではいちいち座らずに料理を置ける。食べる側は足の悪い高齢者はもとより畳に座るといふ日常生活をしていない人たちが増えているのである。

食事は先ほどの基本である地元の新鮮な食材を工夫して出しており、もちろん旨い。相模湾でとれた海の幸、そして伊豆半島の山の幸もある。海幸彦と山幸彦という言葉はこんなことが語源かも知れない。そしてボリュームもあり、26 歳の食べ盛り(?)の息子は、たいそう感動している。美味しい食事を沢山いただき、さらに歩き旅のおかげで、部屋に戻るとバタンキューである。

きのくにや旅館の朝食はバイキング形式である。品数が豊富で一般的な宿のバイキングの 2 倍くらいの品ぞろいである。味はもちろん合格点で、特に温泉卵は絶品である。

本来、バイキングとは北ヨーロッパの海賊の意味であるが、食べ放題の料理のことを帝国ホテルがそのように名づけたそうである。もちろん外国では通じない、欧米ではビュッフェが一般的である。

■箱根神社

朝 10 時に宿を出る。

昨日降りたバス停からバスに乗って、箱根神社の入口まで戻りそこから歩き始める。せっかくなので箱根神社に立ち寄る。

湖の湖畔で森の中のたたずまいで、大きく古い立派な神社である。芦ノ湖に突き出て鳥居があり、そこから参道がまっすぐに延びて、いくつかの鳥居をくぐって参道が本殿まで続く。この湖に突き出た鳥居が正面玄関のようである。

私たち一般の観光客・参拝者は、湖からまっすぐ延びる参道に途中から入る。つまり横入りする感じである。

これと同じ様なことを過去の旅行であったことを思い出した。広島県江田島の旧日本海軍兵学校（現在は海上自衛隊幹部候補生学校）に行った時である。海軍（海上自衛隊）ではあくまでも正門は海であり、公式訪問者は棧橋から上陸（入門）するとのことである。私たちが入門した守

衛さんのいる門は通用門とのことであった。

この箱根神社でも芦ノ湖の守り神である竜神（九頭龍大神）を迎え入れるため鳥居が湖に突き出ているらしい。そこがこの神社の正門になるのだろう。

箱根神社は九頭龍神社とも呼ばれている。いや正確に言えば箱根神社と九頭龍神社の2つの神社が同居している。



箱根神社



箱根神社参道から芦ノ湖を見る

そして一方の箱根神社は箱根大神が本殿に祀ってあるとのことで、箱根大神とは、瓊瓊杵尊（ニニギノミコト）、とその妻である木花咲耶姫命（コノハナサクヤヒメノミコト）、そしてその三男の彦火火出見尊（ヒコホホデミノミコト）の三神の総称だということである。

日本神話をひもとくと、天照大神（アマテラスオオミカミ）の孫であるニニギが神々の住んでいる高天原から日向国の高千穂に降りてきて、この国を統治するとしたのが「天孫降臨（てんそんこうりん）」である。

天孫降臨により降りてきたニニギが、その後にコノハナサクヤヒメと結婚して生まれた子供が3人いるがその三男がヒコホホデミである。

ちなみにヒコホホデミは別名「山幸彦」、長兄は別名「海幸彦」と呼ばれている。

昨夜宿泊した旅館の料理に海の幸、山の幸が出てきたが、案外自然の産物である食べ物を神としているのかもしれない。

この山幸彦の孫が初代天皇の神武天皇ということで天皇家のルーツであるとのことが古事記や日本書記に載っている。

この三神をまとめて祀ったのが箱根神社なのだから興味深い。セットメニュー的お得感がある。なぜ三神を一緒に祀ったか、おっとあまり深入りしないほうがよい。

話を神話にもどすと、高天原の場所がどのあたりかわかれば天皇家のルーツが推測できるが、このヒントになる神話が「国譲り神話」である。それによれば、もともと山陰地方を中心に信濃あたりまでの大きな国を大国主命（オオクニヌシノミコト）が治めていた。オオクニヌシは因幡の白ウサギの伝説でも有名だが、因幡は今の鳥取県である。

そのオオクニヌシに対してアマテラスがこれからは私の子孫がこの国を治めるから国を譲れとオオクニヌシに言ってきた。そしてその使いが島根県の稲佐の浜に上陸して国譲りに対して否（イ

ナ) か、然 (サ) か、とせまったということである。然とは肯定や同意を表す言葉でイナサはノーかイエスカである。これが稲佐の浜の語源になったという。やはり地名の由来は実に面白い。

そしてこの稲佐の浜に上陸したということから推測すると、高天原とは海の向こう、島根県の海の向こう側、つまり朝鮮半島かもしれない。あるいは九州北部から船で行ったという説も取れないこともない。

あくまでも神話の世界の話であるが、神話とは事実無根な作り話ではなく、それに似た話を記録に残す側がある程度都合良いように記述したものと私は思う。古事記も日本書紀も天武天皇が命令して作らせたものであり、天皇家がこの国を統治する正当性を記述している。

国譲り交渉の結果はオオクニヌシが折れ、オオクニヌシは「あの世」の世界を治め、アマテラス側が「この世」の世界つまり日本を治めるとなった。だから「あの世」を治めるオオクニヌシのために出雲大社を作り、祀った。

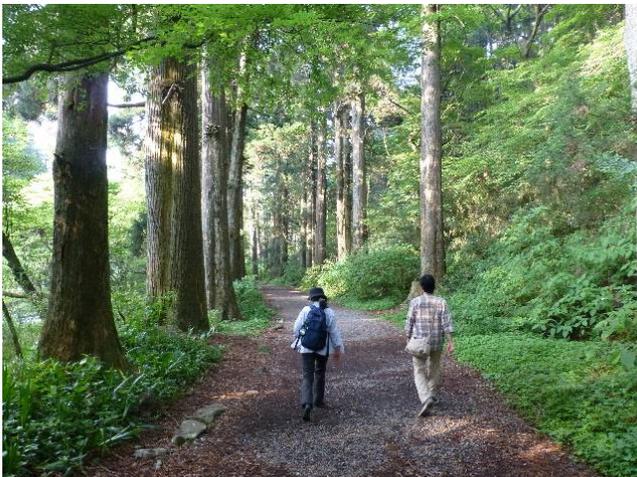
日本の神社とはアマテラスをはじめ神々や天皇を祀っているのであるが、天皇家に統治権を差し出した先住民族の長を祀った出雲大社だけは他のどの神社とも違う存在なのである。

これらの話は長くなるので今後の旅で見に行こうと思う。

■第6区を歩く

箱根神社は豊臣秀吉や徳川家康など名だたる戦国武将が来社した記録が残っており、これも箱根が歴史の街である事を裏付けている。その歴史を感じるためにも旧道を歩くことにした。

旧道とは昔の旅人が本当に歩いた東海道のことで、現在の1号線とところどころ並走している。木立の中を整備された道が続く、もちろん舗装などされていない。木漏れ日が非常にすがすがしい。この道の整備だけでも大変な労力がかかると思う。



旧東海道

このまま気持ちが良い旧道をずっと歩きたいところだが、全てが整備されているのではないのと、箱根駅伝ルートから大きく外れてしまうので、また1号線にもどる。

本日の歩き旅は下り坂ということもあり快調である。そしてまた別荘地の中をいく。

今日も自転車やランナーが多い。昨日の第5区では私たちが山登りであったので対向の自転車やランナーは下り坂をすいすいと降りてきたが、今日の第6区になるとその反対で自転車やランナーは必死の形相で登ってくる。形相はすごいが、気持ちよく汗をかいているのがうらやましい。

「頑張れよ！」と声をかける。笑顔が返ってくると、何となく旅のふれあい、コミュニケーションしたような気分になる。

昼食は通りすがりのセブンイレブンでとる。三日前にオープンしたばかりの店で、キャンペーンを実施中ということで弁当も少々安くなっている。早速買いこみ、店の中のイートインのテーブルに腰かける。5~6人分くらい席があり便利である。

コンビニオタクの息子の話では、最近のセブンイレブン店舗ではこのような席を設けるようである。確かに車での来客は車の中で食事ができるが、私たちのような徒歩や自転車のお客は食べる場所がないので便利である。

5月とはいえ31日で暑い、5月の太陽光は12月の10倍くらい紫外線が強いそうである。その紫外線の影響からか昼食をとったあとは午後の日差しの中、3人は無口になり、もくもくと箱根湯本を目指して歩く。

下りの山道で日差しを遮る木々は気持ち良い。そしてひたすら歩く、箱根湯本を通過し箱根登山鉄道の風祭の駅を過ぎるとようやく第6区ゴールである。60cmくらいの杭の表示がある。

ゴール地点は第5区の出発点とは異なる場所にある。第6区は20.81kmで、第5区が23.22kmなので、復路の方が短い。過酷な山登りの第5区をさらに過酷にするための演出なのか、中継所の使用許可の問題なのか良くわからないが、とにかく短い。

時計は15時40分を指している。朝10時に旅館を出て箱根神社など立ち寄りながら5時間40分で20.81kmを歩いた。

■打ち上げ

蒲鉾で有名な小田原の鈴廣本店が第6区ゴールのすぐ前にある。暑いのと喉が渇いているので、とにかくお店に入る、ちょっと一休みである。さすがに老舗の本店、お店の中は広い。そして相当の人数のお客でごった返している。

店内にはいろいろな種類の蒲鉾の販売コーナーがあり、各コーナーでは試食も出来る。そんな一角に箱根の地ビール、それも生ビール販売コーナーが目にとまり足を止める。

箱根の山を歩いた自分へのご褒美とか、なんとか思いつつ生ビールを買おうとすると、なんと息子がおごってくれるというありがたい申し出がある。

コイツもようやく人生の機微がわかるようになってきたかと思いつつ、歩き旅は運動によって人間の連帯感を強めるものかと感激し旅のチカラを感じる。当然、断るべくもなく生ビールをいただく。乾杯

片手にビールを持ちながらの蒲鉾試食めぐりをする。それにしても蒲鉾がこんなにビールに合うとは感激である。そして同じような事をしているお客は私たち親子だけでは無いようで、気が付いたらあちらこちらにビール片手の試食ツアーご一行様がいる。そんな皆が皆、歩き旅をしてきた訳ではないがとにかく蒲鉾にビールである。

打ち上げにこんなに美味しくビールを飲めるのは、運動の後だからと、あとは電車で帰るだけという安心感と旅の解放感と思う。

「ハレとケ」という言葉がある。明治の民俗学者の柳田國男によれば日本人の伝統的な世界観のひとつだそう。簡単に言えば非日常と日常の意味である。もともと「ハレ」とは節目を指すもので、「ハレ」の語源は「晴れ」であり、晴れ舞台や晴れ着などで使用される。これ対し「ケ」は日常で、例えば普段着のことを「ケ着」と昔は言っていたそうである。

昔、多くの人々は農民だから「ケ」は農作業である。そして「ハレ」は結婚式や村をあげて行う祭などで、これにより当時は生活にメリハリをつけていた。

現在「ハレ」は祭りだけでなく、個人で計画的に意図的に創り出すことが出来る。

そう、その最たるものが旅だと私は考える。だから旅は非日常でなければならない。

家の近所を歩くウォーキングは日常であるのに対して、知らない街を歩く旅、これは旅である。

知らない街までいく移動手段に電車を使うレール&ウォーキングは最も簡単に「ハレ」を体験できるのである。この箱根駅伝ルートは首都圏に住む者にとって容易に効果的なレール&ウォーキングを体験出来る。大都会、海岸線、歴史、政治、文学、温泉、美味しいもの多くの体験と感動を与えてくれる。

帰りの電車の中で、家族3人で今回の旅について話しはじめる。

箱根という温泉地、いやその地域について根本的な勘違いをしていたことに気がつく。箱根というと温泉であり、温泉というと群馬県出身の私と妻は草津温泉をまず頭に浮かべる。テレビ番組で日本各地の温泉のランキングをつけるような企画があると草津も箱根も共に上位に顔を出す常連である。

電車の中の会話はまさしくこのこと、つまり草津と箱根の比較だ。この2つを比較してみると草津はまぎれもなく良質な温泉そのものであるが、箱根は温泉だけでなく総合力であり、山全体が箱根である。その総合力とは、例えば歴史でいえば、文化、芸術、神社、石仏宗教などである。それに自然といえば、富士山、芦ノ湖、箱根山、相模湾である。それらに加えて高級別荘地、温泉地でもある。海の幸や山の幸が食せるというメリットも享受できる。従って比べる事に意味が無いのかも知れない。

それらの会話には、今回の歩き旅という体験で得た箱根に関する情報や気持ちが裏打ちされている。歩くことによって得られること、歩かないとわからないことが多い。やはり歩き旅はバスや電車の旅とは何かが違うのである。

その何かは第10区のゴールまでとっておくことにしよう。

第三章 第7区～第10区

■第7区小田原を出発

2015年10月11日、風祭駅前の第7区小田原中継所を出る。

往路つまり第5区でのスタート地点は小田原の箱根口にある老舗ういろ屋の国道1号線をはさんだ反対側のバス停付近であった。復路の今、そのういろ屋の前を通りかかり、せっかくの機会なので店に入りういろ屋を買い求める。

店内では試食もできるので、早速いくつかの試食品を食べてみる。ういろ屋は米粉でつくった蒸し菓子である。スタンダードな白、そして茶や小豆を混ぜ込んだものなどいくつか種類がある。菓子なので基本的には甘いのであるが、甘さをおさえた上品な味である。

店内を見てまわると、菓子のういろ屋の他に菓のういろ屋がある。菓の方は高級感あふれ、かなり高額である。残念ながら試食はできない。そもそも菓は試食(試飲)しないか。

ういろ屋の歴史が店のパンフレットに書かれている。

まず、この店の名が外郎家(ういろ屋家)である。外郎家は元の滅亡とともに中国から日本に帰化した家で、中国秘伝の菓のういろ屋を朝廷に献上していたそうである。その後、外郎家で菓子のういろ屋を創ったということである。そして京都にあった外郎家を小田原北条家の創始者である北条早雲が小田原に招いたとのことである。

元の滅亡から北条早雲の時代は室町時代である。話はそれるが、最近私は室町時代が好きになっている。室町幕府は鎌倉幕府や江戸幕府に比べるとなぜか人気がないが、その室町時代は面白い。現在いわゆる和風と呼ばれる日本文化の礎を築いた時代である。金閣寺や銀閣寺は有名であるが、特に銀閣寺は書院造で畳を部屋に敷きつめる使用方法など、それまでは板の間であったが、いわゆる和室の原型をつくった。建物以外でも将棋、折り紙、華道、茶道などの文化、何より蒸気風呂しかなかった風呂が湯船につかる風呂になったのもこの時代である。

そして北条早雲の頃から戦国時代がはじまり室町幕府の統治はかたちだけになり、多くの戦国大名が出現する。その北条早雲から数えて5代目当主の北条氏直の時に豊臣秀吉の大軍勢に包囲されて小田原城は無血開城し、戦国時代が終わる。つまり小田原北条氏の時代が戦国時代なのである。ちなみに鎌倉幕府の執権北条氏はこの小田原北条氏とは無関係である。

それにしても、ういろ屋は名古屋が有名であるが、ここ小田原が本家であると初めて知る。

小田原の市街地外れあたりから、妻が民家の庭に鳥居と社(やしろ)があると声をかけてくる。確かに通常の民家の庭に小さな鳥居と社が建っている家がある。そう言われてから数えてみれば、この街道沿いを歩いているだけでもその数は10軒以上も数える事ができるので、路地に入れば相当な数になると思う。祀っているのはお稲荷様である。

さらには3階建てのビルの屋上にも発見する。おそらく家を壊してビルを建てるのにあたり、庭の鳥居と社を屋上に移設したらしい。

この鳥居と社の組合せが偶然にも私の住む神奈川県座間市にもあったので、その立て札の記載

をそのまま書くと「稲荷社は個人の屋敷の神としての稲荷、同族で祀る稲荷、一定の地域の人々が建てた講中稲荷と様々である。祀る神は稲荷大明神で五穀豊穡をつかさどる神、さらには家を守る神として信仰され、市内全域にわたって祀られている。この稲荷社は・・・」のように書かれており、座間市のこの社の場合は戦国時代に創建とある。この地域つまり相模の国では民衆の信仰が室町時代に広まっていたようである。これは北条氏の影響かもしれない。

民家の庭の鳥居と社、そんな光景を見過ごしていたが、昔は民間信仰が現代よりはるかに盛んであったことを思い知る。確かに現代人は信仰心が薄くなってきている。農業に従事しないので五穀豊穡を祈る必要がないからだろうか。

そんなことまで考えてしまう。だから歩き旅は面白い。

そしてまた何気なく歩いといると、小さな会社の前であるが二宮尊徳の石像が立っている。そのさりげなさが、やっぱりここは二宮尊徳の故郷だと感じる。



鳥居と社が庭にある民家



二宮尊徳の石像

■寺カフェ

小田原のはずれに来て寺カフェという看板が目にとまる。メニューにランチ「おばんざい」とあり、遅い昼食をとるには程よい時刻でもあり、なんとなくお寺のランチ、それも「おばんざい」とくればヘルシーな印象をもったので入ってみる。

何よりも寺カフェという得体の知れないものが私たち家族の興味をそそる。

恐る恐る境内に入ると、通常のお寺のように本堂がある。その本堂の左隣に寺カフェの入り口があり、入り口ドアを入ると右側がカフェの店内になっている。このカフェはちょうど本堂の下に位置している。

通常、お寺の本堂は階段を登り、高床になっている。その床下の部分は雨がしのげるので、時代劇では旅人などがそこで泊まったりするシーンがでてくる。このカフェはその部分に位置しているが、床下の感じは全くしない。カフェの床は地面と同じ高さで、天井の高さは普通の高さである。そんなカフェが本堂の下にある、従って広さも本堂の大きさくらいになっている。古い木造建築を予想していたが、築数年の新しく近代的なカフェである。

テーブル席がいくつか有り、総勢 20 人くらいは座れる。もう 2 時も過ぎた頃なのにお客は 10 人そこそこで結構の賑わいである。入ってすぐのところに小さな厨房があり、客席がその向こうに広がっているが厨房と客席の間で和尚さんが袈裟姿のままパソコンをたたいている。年配だが、がっしりとした体格で気の良さそうな和尚さんである。真正面の窓はステンドグラスになっており、その前にはグランドピアノが置かれており両サイドに高さ 1 m 位のスピーカが存在感あふれるように置いてある。

そこからジャズピアノの音楽が流れており、この珍しい組み合わせに最初は違和感を感じたが、やがて不思議な感じから、少し時間が経つと妙な安心感に変わってきて、なぜか心地よく落ち着く。

私たち家族が初めて来たという顔をしていると、厨房にいた店の若い女性にどこでもお好きな席へお座り下さいと案内され、メニューを渡された。私たち 3 人ともこの奇妙なカフェのおすすめ品のヘルシーなランチ「おばんざい」を注文する。

そもそも「おばんざい（お番菜）」とは京都発祥で、その語源はというと、「番」とは普段使っている粗末なモノを意味する言葉で番茶や番傘などのように使用される。その「番」に惣菜の「菜」をつけて「おばんざい（お番菜）」である。

つまり京都の普通というよりやや粗末な惣菜、おかずである。

名前は粗末な昼食であるが、出てきたものは見事な創作料理である。ガッツリ食べようと思う人には不足気味ではあるが、そんな人は寺カフェには来ない。上品に美味しいものを少しずつ、というものになっている。

料理は中華料理の油淋鶏（ユーリンチー）、サラダ、フランス料理のキッシュ、赤米、小松菜、食後のコーヒーと日本料理とはかけ離れた国際色豊かな一皿だった。なかなかやるなと言いたくなる味である。

食事も一段落し、息子があちこちを物色し始める。本棚やパンフレット、オーディオなど興味をそそるものが多い。私もうろうろし始める。

どうやら、この店の名前は「邪宗門」というらしい。そんな時、先ほどパソコンをたたいていた和尚さんが説明しましょうかと声を掛けてきた。

この寺は浄土宗ではあるが、この和尚さんはイエスキリストも、ムハンマドも好きで全て仲良く受け入れるそうで、だから宗派は「皆の宗」とのこと。それゆえ看板に十字架もあり、ステンドグラスもありなのだ。

戦中の生まれということなので、多分 72~73 才くらいで温厚な話し方をしているが、中身はエネルギーだ。

まず、多趣味、若い頃からオーディオマニアでオーディオ装置は自作である。自分で半田ごてを握ってオーディオアンプを自作し、その自作したアンプから出た音が、今カフェに流れている。

昔はラジオ工作の好きな少年はオーディオに進むか無線に進むかで、和尚さんはオーディオに進んだとのこと。私もラジオ工作からアマチュア無線に進んだ旨を伝えると、和尚さんのテンションが一段上がったような気がする。仕事は何をしているのか、何故ここに来たのか、楽しい会話が続く。

和尚さんの話に戻すとオーディオマニアから音楽を聴き、楽器も弾き、音楽会も開く。このカフェで定期的に各種音楽会を開催しているという。その人間関係の広さがカフェの中のいろんなものから感じられる。寺と音楽を中心に一つのコミュニティが出来上がっているようである。

もともと鎌倉のお寺が実家でそこで修行をした。和尚さんが学生時代に邪宗門という喫茶店に出入りしその店が閉店しその後有志たちが名前を引き継いでそれぞれ出店した。和尚さんは鎌倉に喫茶店を開いたが店が老朽化したのでここ小田原に移転させたとのことで、だから本堂もカフェも新しい。移転においては新しいお寺を求めて、本堂の中は金ピカや朱色をやめて仏像も含め自然の木の色で統一したという。

本堂の見学も勧められて、せっかくの機会なので寺カフェを出て本堂に入る。

これもまたびっくりである。中は畳敷きであるが、畳の上に教会のような椅子が並んでいる。正座の必要がなく、このほうが信者の方も楽だというのである。そして本堂中央の奥に高さ 2m くらいの木の仏像があり、確かに金色や朱色はなく、木の良さが出て落ち着いた感じがする。

何故、金色や朱色にしなかったかはその後の説明で理解できた。

仏像に向かって左側にグランドピアノが置いてある。この本堂でもコンサートをするそうで、そのときは仏像の前にある椅子や木魚をどかすと 5m 四方くらいの板の間になる。このスペースで弦楽四重奏ができるということである。だから、色合いにしても椅子にしてもこのようにしたようだ。



寺カフェの内部、妻と息子



本堂の中（仏像、グランドピアノ、椅子席）

現在、私たち夫婦で関東 88ヶ所のお寺巡りをして 60ヶ所くらいを回ったが、こんなお寺とは初めて出会う。このお寺のコンセプト、いや和尚さんの人生観が宗教を超えたところにあるようで、まさしく「皆の宗」なのである。住職という自分の仕事、そして自分の趣味、信者や音楽友達、そして観客や私たちのような通りすがりのお客など、広く世の中の人に出会いと憩いや楽しみ、そして生きがいを広めるということが、言葉によらずに伝わってくる。

1 時間程の滞在であったが、寄り道をして本当によかったと思う。歩き旅だからこそできることと気づつつ、私たち家族 3 人は和尚さんに手を振って別れた。また来ますよといいながら。

■第8区湘南海岸

10月18日は秋の真只中であるが、この日は暖かく半袖でも問題ないくらいである。平塚中継所から戸塚中継所までの第8区のメインはやはり湘南海岸である。往路を歩いた時も同じであるが湘南海岸は防砂林の海側にウォーキング道路が整備されている。サザンオールスターズの歌にも出てくる烏帽子岩を右に見ながら、江の島方面に向かう。海から日差しを受けて海面がキラキラ輝いている。斜め左後方には富士山もきれいに見える絶好のロケーションであり、こんな気持ちの良いウォーキング道路はあまりない。

このウォーキング道路ではいわゆるサイクリングを楽しむ人もいるが、サーファーも自転車に乗る人が多い。そしてそれは他ではあまり見かけない自転車で、サーフボードを横に付けて走る自転車である。

おそらく最初はサーファーがウエットスーツを着たまま、あるいはTシャツ短パンでサーフボードを抱えて乗っていたのかも知れないが、抱えるのでは大変で危ないので横に付けられるような金具を取り付け、サーフボードを運べるようにしたようである。

この地域で海に近いところに住むサーファーは当たり前のようにあるが、よそから来た者にとっては奇妙に感じるらしい。私は勤め先が茅ヶ崎だったこともあり、そんな友人も知っているのだから違和感を感じないが、確かに珍しい光景である。湘南の気ままな雰囲気の中、サーフィンと海が生活に溶け込んでいることが感じられる私の好きな光景でもある。



烏帽子岩



サーフボード付自転車に乗るサーファー

■第9区横浜を歩く

往路の第2区で「箱根駅伝ルート全ての区間を歩いた中で、この部分が最も景色がつまらない」と書いた。その第2区の復路にあたる第9区の感想も同じである。戸塚中継所から権太坂を通過して横浜駅前が出るが、権太坂は下り坂ということもあって、その坂の存在さえ分からないで通り過ぎる。その意味では高低差も感じることなく坦々と歩く。

この区間は横浜市戸塚区から横浜駅東口そして鶴見区まで全て横浜市内であるが、横浜の観光地でない住宅地を中心とした部分を歩く。住宅地といっても高級住宅地ではなく適度に工場があり、バイパスや高速道路、商業施設もある。

横浜といえば中華街や港、そして山下公園や港の見える丘公園といった観光地を思い浮かべる

が、そんなイメージの裏側の部分、つまり横浜の生活の部分を感じることが出来る。

今日は11月15日の日曜日で、生活感を感じる街並みの中に点在する小さな神社では七五三のお参りの姿を頻繁に見かける。その懐かしく、仲むつまじい光景が街に溶け込んでいる。我が家も20年以上前にそんなことがあったなと思いながら若い夫婦に「子育て頑張れよ！」と小さく声を掛ける。コースはつまらない道でも歩き旅はそんな小さな感動が得られる。

■いよいよラスト第10区

先週の日曜日に第9区を歩いたが、それから一週間後の土曜日の本日11月21日はいよいよゴールの第10区を歩く。

横浜市鶴見から程なく川崎市に入る。往路で東京から川崎に入ってその違いに驚いたが、今回復路でも横浜から川崎に入ってもやはり同じように感じる。明らかに街の雰囲気の違い、自転車の通行量も多い。例えばドコモショップの前には自転車だけである。普通どこの都市でも見かけるのはドコモショップに自動車である。自転車は環境や健康に良いのだが、この街はそうではない。自転車がが多く、その結果放置自転車も多い。そして路上のゴミも多い。

歩道の端に花壇のような緑地帯を設けてあるが、草が伸び放題でゴミがたくさん放置してある。道路中央にある中央分離帯も伸び放題の木々や草とゴミの山である。

どこかの発展途上国に迷い込んだような錯覚に陥る。歩いていると特に良く分かる。

割れ窓理論というのがある。アメリカの犯罪学者の理論でオリジナルは **Broken Windows Theory** である。「一つの窓が割れているのを放置しておく、誰も注意を払っていないと思われ、やがて他の窓も全て割られる」という理論である。そして治安が悪くなるのだが、それを防ぐためには些細なことから注意を払い管理維持することが重要とのことである。

この街の状況に似ている。こんなことになってしまう原因は一体何だろうか。行政なのか住民のモラルなのか。いやどちらかがしっかりしていれば、こんな状態にはならないだろう、きっと両方とも問題があると思う。



ゴミに溢れる中央分離帯



放置自転車の残骸

多摩川にかかる六郷橋を渡ると大田区に入る。大田区といえば私の歩き旅の友人Kさんが大田区出身で歩き旅の途中で大田区の名前の由来を聞いたことがある。大田区は大森と蒲田が合併し

てできた区でそのために大田区は「太」ではなく「大」なのだと思われ、自慢げに言っていたこと事を思い出した。確かに群馬県にある太田市とは違う。最近では合併によって何やらわからない「みどり」とか「さくら」とかという地名にするより由緒正しい感じがする。

そして大田区はご存知のとおり町工場（こうば）の街で、小さな町工場が多い。日本の製造業を支えてきたのはこのようなこの中小企業であり、町工場であろうとマスコミが取り上げるが、私もそう思う。

私も大手電機メーカーのエンジニアのはしくれであり、それを実感する。大企業のモノづくりは中小企業との密接な連携によって成り立っている。開発から製造、そして高い品質もそのような連携によるものである。いや連携というより中小企業のおかげかもしれない。

ところが価格競争に陥って、競争力確保のために生産コストの安い中国をはじめ新興国でモノを作るようになってから、日本の特に電気製品のモノづくりがおかしくなっていた。最近ではまた円安や海外の人的費用が高騰しているため日本回帰が始まっているが、自分たちの成り立ちや強みを見つめ直すことはとても重要である。

北品川に品川神社がある。なかなか良さそうな神社なので立ち寄る。良さそうというのは、そんなに大きくもなく小さくもない規模で、歴史もありそうな神社である。境内には舞台である神楽殿や稲荷神社、小さな富士山もある。小さな富士山はいろいろなところで見かけるが、ここは近所の子供たちの遊び場になっているようである。

源頼朝が海上交通安全のため安房の国から分霊してここに開いたとのことである。由緒正しいはずである。

私たちが訪れた時、ちょうど結婚式を挙げている。近所の人々かと思われる。神主が雅楽の独特な音色の笛吹きながら先頭を歩き、新郎新婦や親戚縁者が後に続いて本殿に入っていく。最後尾はトビ職のかっこうをした人がしめくくる。このほほえましい光景はこの神社がとても地元で馴染んでいる感じがする。



品川神社の結婚式



江戸城開城会見跡地の碑

田町で江戸城開城の会見の碑を偶然見つける。江戸城の無血開城をするために西郷隆盛と勝海舟が会談を行った旧薩摩藩邸跡地に建てられた碑であるが、現在は自動車販売店になっている。

江戸時代はこの場所のすぐ前は海であったとのこと、薩摩藩邸には船で薩摩から運ばれた荷

をここで陸揚げしたとのことである。

明治以後にかなりの面積を埋め立てて海岸線が南に移動し、当時は海の中だったところを現在の山手線は走っている。

■ゴールイン

港区芝に入る。夕闇がせまりつつ、徐々に東京タワーが大きく見えてくる。芝といえば徳川家の菩提寺である増上寺がある。その増上寺正門をくぐりとライトアップされた東京タワーと本堂と木々の紅葉と一緒に見える。夕闇の西はまだ明るい夕焼け空で、そのバランスがとても素晴らしい。こんな風景を簡単にしかも無料で見る事ができるとは、やはり東京である。外国人観光客もたくさん写真を撮っている。東京都民でもない私だが、「どうだ、東京はすごいだろう！」などとなぜかと言いたくなる。



増上寺と東京タワー



ゴールのモニュメントと妻と息子

読売新聞社前に到着する。もう夜になろうとしている 17 時 44 分である。ちょうど玄関前にゴールテープを切るモニュメントがあり、それをバックに記念写真を撮る。息子は両手を上げ、モニュメントのポーズをまねている。本人はテープを切った気分であるらしい。

ともかくお疲れ様である。よく考えるとすごい事だと思う。家族で約 2 年かけて 10 日間で 217km を歩いたのである。

歩き終わり、家族みんなの顔は満足感溢れているようである。駅伝の優勝テープを切るような大感動という程ではないが、さわやかな達成感と十分な満足感がある。

その要因は何だろうか。確かにレール&ウォーキングは日常から簡単に非日常を体験できる良さがある。さらに健康にも経済的にも優れている。でも、それだけではこの満足感やみんなの笑顔は説明がつかない気がする。

感動の要因はやはり箱根駅伝ルート、そのコースにあると思う。

東京都千代田区の東京都心からスタートして港区、品川区、大田区を経て神奈川県の東から西まで川崎市、横浜市、藤沢市、茅ヶ崎市、平塚市、大磯町、二宮町、小田原市、箱根町の芦ノ湖畔までである。東京都心から箱根の山まで、それは日本の縮図である。大都会、観光地、温泉地、住宅地、工場地域、海、川、山、湖と全てがそろっている。山に登ることもあれば富士山を近くに見る事もできる。海の波打ち際も歩ければ、伊豆半島、そして彼方に伊豆大島も望める。プチ日本一周と言えるかもしれない。

昔、中学生の時に社会科の地理の先生がこんなことを言っていた事を思いだした。

日本は童謡「汽車」の歌詞「今は山中、今は浜、今は鉄橋渡るぞと思う間も無くトンネルの闇を通って広野原（ひろのはら）」のように、この狭い国土に何でもそろっているということをこの歌詞が教えてくれているのである。およそ世界でもこんな歌詞を歌える国は無いかもしい。それくらい日本の国土は山、川、海、平野などの様々な要素があり、四季もあり恵まれている。

この箱根駅伝ルートはその日本をさらに凝縮している。従って箱根駅伝ルートはプチ日本一周であり、世界屈指の変化に富んでいる場所を10日間で回れるコースなのである。

そして東京～箱根～東京を歩くことにより、そこで生活する人々の目線で人々の暮らしや風土・歴史を感じる。このルートは綺麗な街並みやそうでない街並みもあり、日本有数の観光地やそうでない通常の生活を営む地域もあるが、本当にいろいろな人々の生活や歴史文化に触れる事が出来る。歩き旅の持つ特性が電車や自動車で行く旅とは明らかに異なるものを生むのである。

■ご褒美

この時期は、大手町から有楽町までの丸の内通り沿い約1.2kmが約100万球のLEDで装飾されるイルミネーションが有名である。

2015年のインターネット上でのイルミネーション人気ランキングでは東京都内で2位、全国で4位という場所である。何よりも東京駅から程近く、手軽に見る事が出来る事が魅力である。

その丸の内通りのイルミネーションを私も家族もまだ見たことがないので帰宅途中で立ち寄ることにする。本日は既に23km、約35000歩を歩いたあとであるが、ゴールインしたご褒美と明日は日曜日ということもあり気持ちは軽い。

事を成した後の達成感もあるが、晩秋の夜のすがすがしい空気の中でのイルミネーションは感動的である。まばゆいばかりの光のトンネルが1.2kmも続く、道沿いのカフェで写真を撮ってパリのシャンゼリゼ通りからだと言っても誰も疑わないかもしれない。

写真を撮る人、見物する人、道沿いのカフェでお茶する人、歩道のベンチで語らう人、散歩する人、ただひたすら歩く人など、様々な人々がイルミネーションの下にいる。しかし人々には落ち着きがあって、騒ぐ者もない。さすがに丸の内は大人の街である。

妻は娘に写真をメールで送るからと携帯電話で写真を撮ってくれと携帯を手渡してくる。そして息子も盛んに写真を撮っている。彼女にでも送るのだろうアングルの取り方がやけに入念である。私もこの綺麗な人工の光に久しぶりに感動している。人工的な光といえば何年前にハンガ

リーのドナウ川のナイトクルーズで夜景を見た以来の感動かもしれない。いや規模的にはハンガリーの方が圧倒的であるが、この丸の内のイルミネーションは、そんな大それたことではないところが良いのかもしれない。たまたま箱根駅伝歩き旅の最終日に会った私たち家族にとっては特別なのであるが、東京に住んでいるか東京に通っている人々にとっては日常である。

私も昔はこの近辺に頻繁に出張で訪れていたが、当時はこんなイルミネーションが無かったし、あったとしても仕事帰りに見たのでは何も感じなかったかもしれない。

やはり旅とは出会いである。それもタイミングが重要である。



大手町から有楽町までの丸の内仲通り沿い約 1.2km のイルミネーション

私たち家族は2年にわたる10日間の箱根駅伝ルートのレール&ウォーキングのご褒美をこんな形で頂いた。